

ふらり街角市

ー 街と人をつなぐ直売所の提案ー

Keywords

農業衰退 地域コミュニティ 田園風景
緑地保全 散歩

DZ21158 小田奏絵

1. はじめに

私は、現在さいたま市に住んでいるが、家の近くに広がる「見沼田んぼ」とは物理的にも心理的にも距離がある。

2. 研究背景

私が住んでいる埼玉県さいたま市は、都心に近い利便性の高い街として、多くの住宅街が広がっている。通学や通勤の面から住む場所を選ぶような人が多いため、効率の良い生活を過ごしている。そのため、私たちは地方と比べて地域への関心、愛情が湧かないまま成長してしまっている。また、私は地元の話をするときに地方出身の人と比べて愛着がないことを実感する。これは私自身が街に対して関りを持つ機会がなく成長してしまったことが1つの原因として考えられる。

私が以前市内を散歩していた際に、広大な田んぼとそこに点在する無人直売所を見つけた。それは、都会的なイメージが強いさいたま市の中で、大きな特徴であり、魅力の1つである。これらを地元の魅力として若い世代に伝えていくべきではないか。

幼少時代私は高齢者と関わる機会がなかった街を良く知るのは高齢者と関わる機会があればより街のことを知るきっかけになるのではないか。

3. 研究目的

本研究では、さいたま市にある広大な見沼田んぼを魅力の1つとして、地域住人が街に関心を持つ機会を目指し、街への愛着が生まれることを建築の観点から目指す。

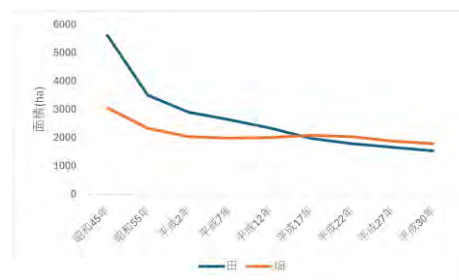
4. 敷地

4.1 敷地概要

対象敷地は、埼玉県さいたま市に広がる見沼田圃を対象とする。見沼田圃は、東京都心から20~30km圏内に位置している。また、畑や田んぼ、雑木林や河川などで約1260ha広がっている。ここでは、里芋やさつま芋などの野菜、果物、植木、カトレア・シクラメンなどの切花、フラワーアレンジメントなどで枝物が栽培されている。現在は、見沼田圃はさいたま市の「見沼田圃保全・活用・創造の基本方針」のもと首都近郊に残された大規模緑地空間として保全活動が行われている。

(1)さいたま市の耕地面積の推移

図1より、田畑ともに年々減少している。宅地化や農業の後継者不足で耕作放棄地が増加しているのが原因である。さらに、平成17年を境に畑は田んぼを上回っている。



理由としては、畑に比べて田んぼは排水性、水はけなど考慮する部分が多いため年々減少している。そのため、現在は畑地が1番占めている。

図1 さいたま市の耕地面積推移

(2)さいたま市の農業従事者の年齢

図2は、さいたま市で農業をしている人の年齢別のグラフである。65歳~85歳以上が6割弱を占めていてさいたま市でも高齢者の人が多いということが分かる。

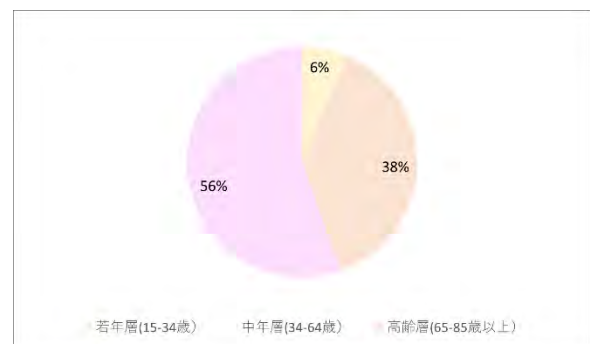


図2 さいたま市の農業従事者世代別

4.2 敷地分析

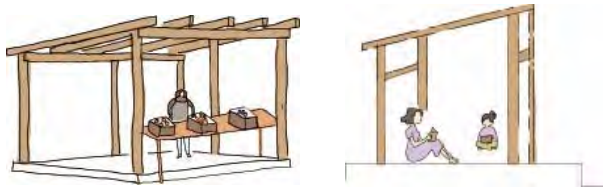
(1)地域住民の居場所

さいたま市は、通勤・通学している人が多いため、昼間の街は子供と高齢者に焦点をあてる。子供は、周辺に公園や小学校の校庭があり、ここで子供たちはよく遊んでいる。高齢者は、大型のショッピングモールに行ったり、夫婦で散歩をして公園のベンチに行くことが多い。

共通点として、公園に居場所はあるが、子供たちは遊具がある公園であったり、ボールが使える場所で遊ぶことが多い。それに対して、高齢者の人は広場に近い遊具のない公園や、静かな公園に居ることが多い。

(2) 直売所の状況

見沼田んぼで農業を営む人の中に、規格外野菜を家庭菜園の一部として栽培している人が多く見られる。中には自分自身で直売所を作り、販売する人も見られる。小さなスケール感であるため、農家の人、街の人など直売



所に集まった人とコミュニケーションがとりやすい。さらに、身長よりも少し低く、屋根勾配の影響で、かがんで販売している野菜を見渡せたり、迎えられているような雰囲気がある。また、身の回りにある部材で直売所を製作しているため、だれでも作れる、風景と調和すると



いう利点がある。しかし、この直売所は地域住民に十分知られていない上に、地形的に見沼田んぼは住宅街と河川を挟んでしまっていて立ち寄る機会がない。特に、河川沿いでない農家は直売所を作っても人が立ち寄る見込みがないため、無償で友人や知人に配っている。また、夏は暑さのため作りすぎてもすぐに腐ってしまうため、毎年困っている状況である。

写真1 無人直売所

写真2 無人直売所

(3) ブリコラージュ

ブリコラージュとは、文化人類学者のクロード・レヴィ＝ストロースが1962年に発表した「野生の思考」で取り上げた概念である。フランス語ではありあわせの道具、材料を用いて自分の手でモノをつくること」を意味する。この無人直売所は、単管パイプ、簾、竹やビールケースが使用されていて農家の方の手作りであることが分かる。

また、無人直売所で共通していることは柱の間隔が一定でないことや作り方が目で見えて分かること。これらの点から周辺の見沼田圃の田園風景と調和して温かみを感じられる。

5. 設計

(1) 設計手法

ブリコラージュを採用して、見沼田んぼ周辺にある無人直売所のような小屋スケールを建物内に入れる。小屋で野菜を買うことでコミュニケーションの促進を図る。また、読書ブースやアトリエにも小屋を取り入れることで地域住民の居場所を作る。さらに、2次部材に簾や竹、流通材などを用いて無人直売所の見た目を再現することで風景との調和を図る。

図2 小屋スケールの空間

(2) 設計趣旨

見沼田圃が広がる近くに直売所と子供が集まるような図書館、高齢者が集う和室などを配置することで、多世代が見沼田んぼと街との距離を近づける。

(3) 設計プログラム

「街の子供の居場所」「農家が発信する場」「街の高齢者の居場所」を有する機能を入れる。子供の居場所には、読書ブースや学習スペース、農家の人が発信する場所には直売所やシェア畑、高齢者の居場所には読書ブースやアトリエを検討する。

(3) ゾーニング

東には桜並木が広がっている。ここは地域住民に散歩コースとして親しまれている。この散歩道から繋がり変わらず散歩が出来るような配置計画である。南側に広がる神社にある木は、どんぐりの木である。ここでは子供が遊ぶ庭としての役割を果たす。

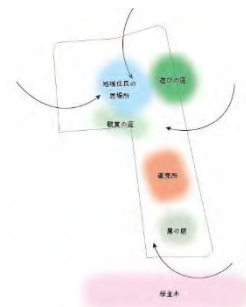


図3 ゾーニング図

6. 終わりに

さいたま市の広域に広がる見沼田圃はあまり認知されないままである。直売所を子供たちが集まれる図書館と併設することで、地域の魅力である見沼田圃を知り愛着が生まれるようにしたい。

7. 参考文献

- さいたま市食育ナビ https://www.saitamacity-shokuiku.jp/G0000001/system/common_content3/585.html
- 見沼たんぼ <https://www.minumatanbo-saitama.jp/outline.htm>

設計概要

さいたま市には、広大に広がる「見沼田んぼ」がある。都心的な場所であるさいたま市では「見沼田んぼ」は1つの魅力である。

街にはいくつか無人販売所があるが地域住民には周知されておらず、街と見沼田んぼとは距離がある。

しかし、小屋スケールである無人直売所はコミュニケーションが生まれる。

この小屋スケールを残しながら、直売所を残すことで見沼田んぼの周知に繋がるのではないだろうか。

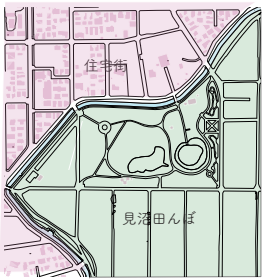
本設計では、直売所の集約を小屋レベルの小さなスケールで、

地域住民の居場所と直売所を重ね合わせることで地域住民に見沼田んぼとの距離が近づく設計を目指す。

街と見沼田んぼ

私が住んでいる近くにある「見沼田んぼ」と地域住民には物理的にも心理的にも距離がある。

都市的なイメージのあるさいたま市で広大な田園風景は街の魅力の1つではないか。



直売所

見沼田んぼ周辺には直売所が点在している

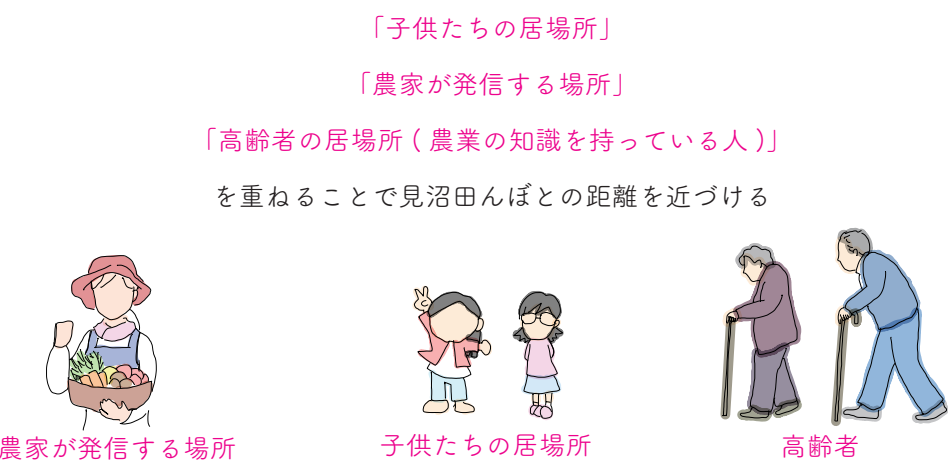
これらは身の回りにある簾やビールケースを使用している

地域住民にはよく知られていなかったり

いつ販売されているのかをよく知られていない



設計コンセプト

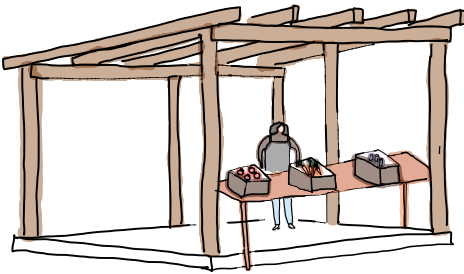


設計手法

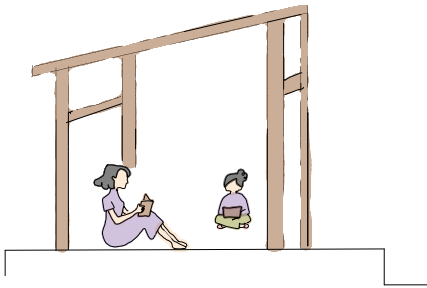
直売所スケールの小屋を建物内に入れる小屋スケールの直売所を作ること

農家の人とのコミュニケーションを図る読書ブースやアトリエも小屋スケールにすることで

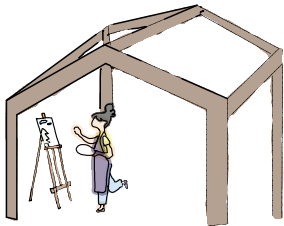
地域住民の居場所をつくる



直売所



読書ブース



アトリエ

直売所で使用されている身の回りにあるものを使用する

ポリカーボネート、ビールケース、簾、流通材を2次部材として活用することで

周辺環境との調和を目指す

